

日蓮大聖人御書全集

やげんたにゆうどうどのごへんじ

弥源太入道殿御返事

新版
1700
ゝ
1701

やげんたにゆうどうどのごへんじ

弥源太入道殿御返事

ぶんえい ねん

がつ にち

さい

ほうじようやげんた

文永11年('74)

9月17日

53歳

北条弥源太

べつ

そうろう

たの

たてまつ

そうろううえ

さいご

おぼ

別のこと候まじ。憑み奉り候上は、最後はこうと思

そうら

かわのべにゆうどうどの

恋

そうろう

ようや

おく

まい

しめし候え。河野辺入道殿のこいしく候に、漸く後れ進

形見

そうら

そうら

らせて、そのかたみと見まいらせ候わん。さるにても候え

むな

おぼ

そうら

ば、いかが空しかるべきや。さこそ覚え候え。

とうせい

われ

ほけきよう

知

ひと

もう

ただし、当世は「我も法華経をしりたり」と人ごとに申し

そうろう

とき

ほけきよう

ぎようじや

数

多

そうろう

ほけきよう

候。時に法華経の行者はあまた候。ただし、法華経と

もう

きよう

てんしびよう

もう

やまい

そうろう

てんし

もう

申す経は、転子病と申す病のように候。転子と申すは、

おや

こ　　すく

そうら

やまい　　かなら

つた

親のようなる子は少なく候えども、この病は必ず伝わり

そうろう

れい

いぬ

こ

はは

ほ

つた

ねこ

こ

はは

候なり。例せば、犬の子は母の吠えを伝え、猫の子は母の

よう

つた

ねずみ

と

用を伝えて鼠を取る。

にほんこく

ろくじゅうろつかこく

しまふた

なか

ほとけ

みてら

日本国は六十六箇国・島二つ。その中に仏の御寺は

いちまんいつせんさんじゅうしちしよ

うち

そうに

さんぜん

一万一千三十七所、その内に僧尼、あるいは三千、あるい

いちまん

いつせんいつびやく

じゅうにん

ひとり

は一万、あるいは一千一百、あるいは十人、あるいは一人

そうら

みなもと

こうぼうだいし

じかくだいし

ちしやうだいし

候えども、その源は弘法大師・慈覚大師・智証大師、こ

さんだいし

みでし

そうろう

やま

ざす

とうじ

おむろ

しちだいじ

の三大師の御弟子にて候。山の座主、東寺・御室・七佛寺

けんぎやう

おんじやうじ

ちやうり

いず

はこね

につこう

じこやうとう

てらでら

の検校、園城寺の長吏、伊豆・箱根・日光・慈光等の寺々の

べつとうとう

みな

さんだいし

ちやくちやく

ひとびと

さんだいし

別当等も、皆この三大師の嫡々なり。この人々は三大師の

よ

ごとく読むべし。

さんだいし

ほけきよう

いつさいきよう

しようれつ

よ

そうら

それ、この三大師、法華経と一切経との勝劣を読み候

こうぼうだいし

ほけきようさいだいさん

じかく ちしよう

ほけきよう

いしには、弘法大師は「法華経最第三」、慈覚・智証は「法華経

さいだいに

けろん

よ

そうら

いま

最第二」、あるいは「戲論」なんどこそ読み候いしか。今ま

たかくのごとし。

にちれん

まなこ

ひがめ

そうろう

ほけきよう

ただし、日蓮が眼には、僻目にてや候らん、「法華経は

もつと だいいち

みな

しんじつ

しやかぶつ

たほうぶつ

じつぼう

最も第一なり」「皆これ真実なり」と、釈迦仏・多宝仏・十方

しよぶつ

と

しようみよう

たま

さんだいし

すいか

の諸仏は説いて証明せさせ給えり。この三大師には水火

そうい

そうろう

すえ

う

ひとびち

か

あと

つ

か

の相違にて候。その末を受くる人々、彼の跡を継いで彼の

しよりようでんぱた

わ

もの

たま

あらそ

たも

所領田畠を我が物とせさせ給いぬれば、いかに諍わせ給

さんだいし

ひがごと

とがのが

うとも、三大師の僻事ならばこの科遁れがたくやおわすら

み

そうら

にちれん

こうじやく

もの

そうら

もう

んと見え候えども、日蓮は怯弱の者にて候えば、かく申

ひとおんもち

いま

にほんこく

ひとびと

われ

すことをも人御用いなし。されば、今、日本国の人々の我も

われ

きよう

よ

もう

もち

おぼ

我も経を読むといえども、申すこと用いるべしとも覺えず

そうろう

候。

お

そうら

おんおとずれ

そうら

おも

これはさて置き候いぬ。御音信も候わねば、いかにと思

そうら

おんつか

そうろう

ごしよろう

ごへいゆ

つて候いつるに、御使いうれしく候。御所労の御平愈の

よし

そうろう

そうろう

おお

こうむ

そうろう

由、うれしく候、うれしく候。なお仰せを蒙るべく候。

きようきようきんげん

恐々謹言。

くがつじゅうしちにち

九月十七日

にちれん

日蓮

かおう

花押

やげんたにゆうどうどのごへんじ

弥源太入道殿御返事